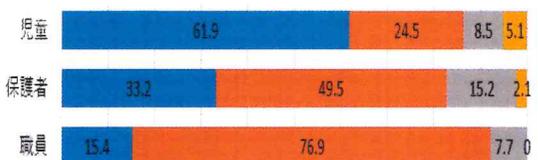
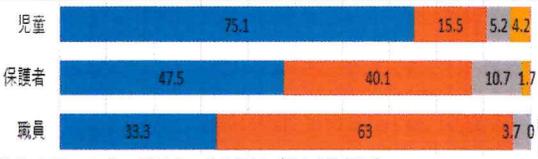


評価項目	評価指標	具体的な取組	学校評価アンケート結果（児童・保護者・職員）		学校自己評価		学校関係者評価	
			調査期間：令和7年12月1日から12月12日まで 回答種（％） ■ A：そう思う ■ B：どちらかといえばそう思う ■ C：どちらかといえばそう思わない ■ D：そう思わない	回答者別	総合評価	評価内容 ○成果 ●課題	評価	評価内容
確かな学力の定着と向上	1 学校で学習した内容について理解している。	○わさびの授業の実践 ○国算平均 80点突破の実現 ○授業理解度80%以上の達成	児童 61.6 31.1 5.2 3 保護者 36 50.2 11.1 2.7	A B	B	○主体的・対話的な学びの導入やICT機器を活用した視覚的な支援等、日々の授業改善により、子どもたちが「わかった!」という達成感を得られている。 ○学習端末の家庭持ち帰りを継続し、職員は積極的な活用を推進している。児童・保護者の肯定的な回答も7割を超えており、学習端末を学習ツールとして活用する習慣は着実に浸透している。 ○学校での読書活動が一定の成果を上げている。職員の評価も8割を超えて肯定的であり、学校全体で読書を推奨する雰囲気が醸成されている。 ●授業の終わりに「何が分かったか」「何ができたようになったか」を言語化させるなど、振り返りの充実を図る必要がある。 ●学校では本を手取るが、家庭での自発的な読書習慣には至っていない児童も見られる。今後は、読書の楽しさを家庭へ広げるために、デジタル端末を活用した電子書籍の紹介等、更に本に親しむ仕掛け作りが課題である。	B	○落ち着いた環境の中、教員による丁寧で分かりやすい指導が行われており、学校全体に学習に集中できる雰囲気が醸成されている。 ○タブレットを効果的に活用し、児童が自ら検索や学習に習熟している。ICT活用が児童の高い学習理解度や学習意欲の向上に直結している。 ○読書率が高く、読書習慣が身に付いている児童が多いことは素晴らしい。本との出会いを大切にしている指導が実を結んでいる。 ●全体的な理解度は高いが、目標未達成の児童に対する要因分析と、個別のフォローアップ体制の充実を期待する。 ●ICTの利便性を享受する一方で、アナログな技能（漢字の「とめ・はね」、氏名を漢字で書く習慣等）の定着が疎かにならないよう、バランスのとれた指導を継続してほしい。 ●家庭での読書時間の確保を促すとともに、学校においても「感想の発表」や「音読」の機会を取り入れ、アウトプットを通じた深い理解や表現力を養ってほしい。
	2 学習用端末を使って授業や家庭での学習に取り組んでいる。	○学習用端末の毎日活用 ○家庭でのキュービナ活用率 80%以上	児童 45.9 28.9 16 9.2 保護者 34.6 37.4 18 10 職員 54.2 29.2 16.6 0	B B A				
	3 進んで読書をしている。	○年間目標冊数の達成 ・低学年80冊 ・中学年60冊 ・高学年45冊	児童 50.2 26.6 13.6 9.6 保護者 22.8 25.3 29.4 22.5 職員 29.6 55.6 14.8 0	B C B				
基本的な生活習慣ものの定着と所づくり	1 自分から進んであいさつをしている。	○SWPBSによる基本的な生活習慣の定着 ○自発的なあいさつ 80%以上の達成	児童 63.1 23.1 10.1 3.7 保護者 34.6 46.4 17.3 1.7 職員 14.8 63 22.2 0	A B B	B	○児童の約86%が自ら進んであいさつをしていると回答しており、学校での指導やあいさつ運動の実践が家庭や地域での基本的な生活習慣の形成に寄与していると考えられる。 ○学校内及び社会における規範意識は少しずつ定着してきており、落ち着いた環境で教育活動が行われつつある。 ○児童の約9割が「学校生活が楽しい」と回答しており、本校の教育活動の基盤である「安心・安全な居場所づくり」が高い水準で達成されている。 ●「あいさつはするが自分から進んで」という自発性の面で課題が残る。今後は、学校内だけでなく、地域の方々に対しても自分からコミュニケーションを図る態度の育成が必要である。 ●なぜそのきまりが必要かを理解し、「時と場合に応じて自律的に行動する」という一段高い意識の育成が課題である。	B	○自発的なあいさつについて、数値目標を上回る成果が出ている。横断歩道で停車した運転手にお辞儀をするなど、心のこもった行動が見られる児童もおり、指導の成果が表れている。 ○いじめ解消100%の達成や、学校生活への満足度・目標達成率が極めて高いことを、委員一同高く評価している。 ○学校全体に落ち着いた雰囲気が感じられ、児童が安心して楽しく学校生活を送れている様子が伺える。今後も良好な環境を継続してほしい。 ●あいさつには個人差があり、登校中に下を向いてしまうなど、消極的な場面も見受けられる。より「進んで」あいさつができるよう、更なる習慣化を期待したい。 ●あいさつは家庭教育が基盤であり、地域差も生じやすい課題である。学校・家庭・地域が一体となり、地域全体で子どもたちの社会性を育む機運を高めていく必要がある。
	2 きまりをきちんと守って生活している。	○SWPBSによる基本的な生活習慣の定着 ○きまりの遵守 80%以上の達成	児童 53.4 35.6 7.3 3.7 保護者 47.8 46.7 5.2 0.3 職員 18.5 74.1 7.4 0	B B B				
	3 学校での生活が楽しいと感じている。	○学校生活の満足度 90%以上の達成 ○心のアンケートによるいじめ解消 100%の達成	児童 66.1 23.1 6.6 4.2	A				

健康・体力の向上	1 食事のマナーを守って、好き嫌いをなく食べようと努力している。	○全学級での年1回以上の食に関する指導の実施		A B B	B	<p>○日々の給食指導や栄養教諭等と連携した「食に関する授業」等を通じて食育への関心や食に対する感謝の心が着実に育まれている。</p> <p>○児童の約75%が体育の学習に対して高い意欲を示しており、運動への関心は極めて高い。友達と協力して運動に取り組む工夫等、主体的・対話的な授業改善が、子どもたちの「できた」「楽しい」という実感に直結している成果である。</p> <p>●スクールスポーツプランを基に、子どもたちの体力の落ち込み部分について共通理解を図り、重点的に体力向上への取組を行う必要がある。</p>	B	<p>○食に関する授業や指導は着実な成果を上げており、児童の健康への関心や食に対する考え方が高まっている。</p> <p>○児童の体育への関心は高く、積極的に取り組む姿勢が見られる。これは学校生活の充実感にも寄与している。</p> <p>●家庭での食生活が児童の健康や肥満に与える影響も大きいため、学校での指導内容を家庭へも発信し、連携を強化してほしい。</p> <p>●体力テストにおいてD・E判定の児童が、前年度より増加傾向にあるので、体力低下の要因を分析し、具体的な改善策を講じる必要がある。</p>
	2 体育の学習をとおして、体を動かすことへの関心や意欲が高まっている。	○体力テストD・E判定児童10%減少の達成	 <p>○体力テストD・E判定：39.7% (R6 37.7%)</p>	A A B				
家庭・地域等との連携	1 PTA活動等学校と家庭・地域との連携が図られている。	<p>○応援サポーター制度の導入</p> <p>○朝の読み聞かせボランティアの活用</p> <p>○Sigfyの活用</p>	 <p>○愛校作業参加者数229名（参加率78.7%）</p> <p>○応援サポーターによる自主参加型活動の実践</p>	B	A	<p>○次年度のPTA活動の在り方についてアンケートを実施したところ、9割以上の保護者が、本年度導入した応援サポーターの形を望む結果であった。今後も引き続き、持続可能なPTA活動を目指して、活動の精選等の見直しを行うとともに、PTA活動について保護者へ周知を図っていく必要がある。</p> <p>○保護者の約8割から学校と家庭・地域の連携について肯定的な評価を得ている。また、学校だよりやホームページ等による情報発信について、保護者の約96%から肯定的な評価を得ている。PTA活動や授業参観、学校からの情報発信を通じて、学校の教育方針や活動内容が一定の理解を得られている成果と考えられる。</p>	A	<p>○PTA会長を中心とした活動の在り方の見直しを評価し、今後も応援していきたい。新たに導入された「応援サポーター制度」が、PTA活動への心理的ハードルを下げ、意識を前向きに変える有効な手立てとして期待されている。</p> <p>○学校・家庭・地域が一体となった連携の重要性は認識されており、現状の情報発信（学校だより等）の継続が求められている。</p> <p>●PTA活動に対しては「負担感」という意識が依然として根強い。「応援サポーター制度」の定着等を通じて、より多くの保護者が参画しやすい環境づくりを継続してほしい。</p> <p>●学校の教育方針や活動内容を、保護者だけでなく地域住民へもより深く浸透させるための工夫が必要である。</p>
	2 学校だより、学級通信、保健だより、ホームページ等で教育活動の様子を発信している。	<p>○学校だよりの月1回以上の発行</p> <p>○学校ホームページの適宜更新</p>		A A A				